

《原著論文》

# 櫛にみるデザインと漆の文化

## Designs and Lacquer Culture Seen in Combs

阿 部 万里江      清 水 久美子\*  
(Marie ABE)      (Kumiko SHIMIZU)

**Abstract** : The history of combs in Japan is long, including the appearance of red lacquered decorative combs in the Jomon period, and great developments in design in the Edo period. This research considers the meaning of combs, focusing on women's combs and showing the development of comb design in relation to lacquer and hairstyles. Decorative combs are seen in the hairstyles (topknots) of the Jomon and Edo periods, while practical fine-toothed combs were used in periods when long flowing hair was in fashion. The combs made use of such advanced lacquering techniques and became elaborate and refined in the Edo period. Lacquer became a symbol of strong spiritual power. In addition, red and black of lacquer were thought to ward against evil spirits. Combs were also believed to have mystical powers, for hair was thought to have spiritual power. The desire to combine the various powers associated with combs and to absorb their strong "life protecting" power into one's self can be said to have produced these beautiful lacquered decorative combs.

**Key words** : 櫛, 漆, 髪型, 技法, デザイン

### 1. はじめに

現在日本の櫛といえば、髪を梳くための実用的な横櫛が一般的であるが、装飾用としての櫛は縄文時代から存在し、そこには漆が施されていた。その後も櫛と漆の関係は続き、江戸時代において櫛のデザインは漆工技法の向上に伴い、大きく発展した。本研究では縄文時代から江戸時代にかけて用いられた女性の櫛を中心に切り上げ、そのデザイン、装飾技法の発展の経緯を明らかにすると共に、漆塗りの櫛のもつ意味について考察する。

### 2. 漆の使用と技法

#### (1) 縄文・弥生・古墳時代

2011年10月、12600年余前の漆の木が福井県鳥浜貝

同志社女子大学大学院生活科学研究科  
生活デザイン専攻

\*同志社女子大学生活科学部

塚遺跡から発見され、世界最古のものと確認された<sup>1)</sup>。2000年8月、北海道垣ノ島B遺跡からは9000年前の漆の糸で加工した衣類あるいは装身具が発見され、世界最古の漆品であることがわかった<sup>2)</sup>。また石川県七尾市の三引貝塚遺跡から約6000年前の日本最古の漆塗り堅櫛が出土しており<sup>3)</sup>、日本には縄文時代以前から漆の木が自生し、縄文時代には漆文化が存在したのである。

最初は漆の樹皮からにじみ出た漆液に偶然触り、次第に漆の特性を知り、接着剤、防水、彩色塗料として武器や土器、装身具などに用いられたと考えられる。色彩は赤色が最も多く、水銀朱やベンガラ（弁柄）が用いられ、高度な漆精製技術が存在した<sup>4)</sup>。

弥生時代前期には、赤色や黒色漆による塗り分けや細密な意匠も見られたが、中期に装飾性が消え、後期に黒色漆が多くなった。黒色漆は、精製された漆に油煙や松煙の煤を練り込んで作られた。赤色から黒色への変化は、中国・朝鮮からの影響と考えられる<sup>5)</sup>。

古墳時代には、黒色漆塗り「湾曲結菌式堅櫛」（金沢市畝田・寺中遺跡）2点が出土している。これは竹を数本中央で束ねてU字に折り曲げ、帯状の結束をして横木を挿して補強したもので、黒色漆は煤を漆に混ぜた。

また棺には、「即（壙）」「乾漆」が用いられ、水に強く乾燥にも耐える乾漆は貴人の棺に用いられた。その他漆を盛ったままの土器製高杯（図1）、黒漆塗高杯と壺、鉢（羽咋市太田ニシカワダ遺跡）が出土し、黒漆が祭儀に重要な役割を果たしていたことが知れる。

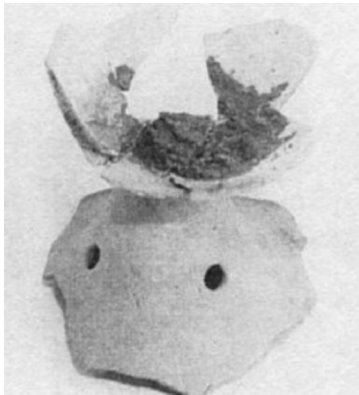


図1 漆祭祀土器（太田ニシカワダ遺跡）  
『漆の文化史』より転載

## (2) 飛鳥・白鳳・奈良時代

538年の仏教伝来と渡来人による技術は、既存の漆文化に大きな影響を及ぼし、仏教と漆が初めて結合した作品として「玉虫厨子」（法隆寺）があげられる。また法興寺（飛鳥寺 596年建立）の堂宇は漆塗りに黄金彩色された。

奈良時代中期頃の前期難波宮（孝徳天皇の難波長柄豊碕宮）からは、内部に漆が残った須恵器（運搬用器）が多数出土した。漆は税として徴収され、国家的管理の下に集荷されていた。

一方仏教の発展と共に乾漆仏、木芯乾漆仏が多く造られ、漆皮、捲胎、乾漆、さらに密陀絵の技法が生まれた。また中国伝来の技法に日本独自の発展が加わり、末金鏤、螺鈿、平脱、平文、蒔絵などの加飾技法が確立し、箱、机、瓶、楽器などに施された。

大宝律令（701年）では、大蔵省管下に「漆部司」が置かれ、その下に漆部を置いて漆器を作らせ、漆の人工植栽も行った。漆の生産は国家の優先事項であった。

## (3) 平安時代

この時期、漆の装飾は阿弥陀堂建立に伴い飛躍的に発展した。宇治平等院阿弥陀如来堂の天蓋や須弥壇は螺鈿と蒔絵で荘厳され、平泉中尊寺金色堂の柱は金の研ぎ出し蒔絵で表され、宝相華唐草文が螺鈿で金地に埋め込まれた。梁、斗栱、蛙股、天蓋、須弥壇と高壇に金の沃懸地が施された。ただし金銀の製粉技術が未熟で、意匠の輪郭が曖昧になったことで、優雅なものとなった。

一方漆器は黒色漆に代わり、朱器（朱漆塗りの食器・酒器類）が主流となり、赤色漆の食器は権力者の象徴となった。後期に国家権力が衰え始めると、塗師や轆轤師などの工人は自立し、地方の富豪層の求めに応じて仕事をするようになった。

## (4) 鎌倉・室町・安土桃山時代

鎌倉時代、地方へ分散した工人は、柿渋と炭粉を混ぜた下地に、精製した漆を1,2層塗る「炭粉渋下地漆器」という庶民向けの簡素な漆器を作った。またスタンプ状のものに赤色漆を塗り、器体に押しつけた「型押し漆器」が安価で量産された。鎌倉彫も木に直接彫刻して漆を塗るため安価となり、仏具などにみられた。

この時期には金の製粉精度が上がり、蒔絵表現が細密化して立体的な「高蒔絵」技法が生まれた。

室町時代、漆工品の意匠は貴族的で優雅なものとなり、高蒔絵の技法や金の製粉精度が一段と向上し、「研出蒔絵」や「切金」も用いられた。

安土桃山時代には、「南蛮漆器」が海外に輸出され、質の悪い輸入漆が用いられた。国内向けにも南蛮風意匠漆器が製作された。また装飾性を重視し、「平蒔絵」や「絵梨地」の技法を応用し、漆を塗る作業を減らし簡略化した「高台寺蒔絵」が確立された。これは武器・武具に用いられ、時間をかけずに効果的な意匠が得られた。

## (5) 江戸時代

地方では、輪島塗、根来塗、津軽塗、若狭塗などが確立された。江戸では幕府お抱えの漆工職人が江戸城本丸の「御細工所」で城内の建造物から調度類まで製作した。江戸から幸阿弥長重、原羊遊斎、柴田是真、京都から本阿弥光悦や尾形光琳など、蒔絵師の名工が数多く輩出された。

幸阿弥長重指揮による「初音蒔絵婚礼調度」（徳川美術館）には、研出蒔絵・高蒔絵・肉合研出蒔絵・平蒔絵・切金・粒置き・平文・極付の高度な技法が用いられた。前期には調度品、後期には櫛・印籠・杯・文房具・

馬具・飲食器・楽器などにみられた。特に後期になると、極端なまでの技術至上主義の下、製作側・享受側共、より優れた技巧を求めた。そして空前の大量生産・大量流通・大量消費時代となり、蒔絵漆工品が庶民の間にも流通し、多様な装飾が生み出された。

### 3. 櫛の用途とデザイン

#### (1) 櫛の種類

櫛はその形状から、縦長で櫛歯が長く、歯の数が少ない「縦櫛」と横長で櫛歯が短く、歯の数が多「横櫛」に分類される。また使用目的では、装飾用の「飾り櫛」と、髪を梳くための「梳き櫛」があり、櫛歯の形成によると、櫛歯を紐状の繊維で結束し、その結束部を塑形・整形する「結歯式」、一素材から櫛歯を刻み出す「刻歯式」、一素材から櫛歯を鋸状のもので挽き出す「挽き歯式」がある。

#### (2) 櫛の用途とデザインの変遷

##### ① 縄文時代～安土桃山時代

##### ◆ 縄文・弥生・古墳時代

縄文時代の土偶の中には、頭部に突起をもつものがあり、女性に髷が結われていたと推察される（図2）。一方でオカッパ型もあり、オカッパ型は日常的、髷を結う髪型は非日常的な特殊例と考えられる<sup>6)</sup>。

またこの時代の櫛は全て「赤色漆塗りの櫛歯の長い縦櫛」（図3）であった。縦櫛は梳くより、むしろ髷の固定か装飾の用途が大きい。しかも全て貴重な漆と赤色顔料が使用されており、髷を結う髪型と赤色漆塗り縦櫛は、特別な女性（シャーマン）が祭事などで用いた可能性が高い。

弥生時代には、『魏志倭人伝』に「婦人は被髪屈紒し（…）」<sup>7)</sup>とあり、結髪をしていたことが知れる。櫛は結歯式と刻歯式の縦櫛が出土しており<sup>8)</sup>、女性の髷に櫛が挿されたと考えられる。



図2 髷をもつ土偶（埼玉県真福寺貝塚）

古墳時代の埴輪は、頭頂部で髪を平たく畳む結髪をし、髷の根元に半月形の縦櫛を挿している（図4）。櫛は前代同様、髷の固定や装飾目的で使用された<sup>9)</sup>。また古墳時代には、縦櫛の他に初めて横櫛が出現したが、漆は使用されていない。

「六大 A 遺跡出土の横櫛」（図5）は、長さ9 cm・幅5 cm・最厚1 cmで、側縁部が外反し背部に丸みがある。挽歯式で歯は58本。1 cmあたり8本が刻まれ、非常に細かく挽き出されている。この頃中国で挿し櫛の風習があり、櫛の形状は上部が丸く下部が角張った馬蹄形であり<sup>10)</sup>、横櫛は中国渡来の可能性が高い。



図3 赤漆塗り縦櫛（青森県是川遺跡）

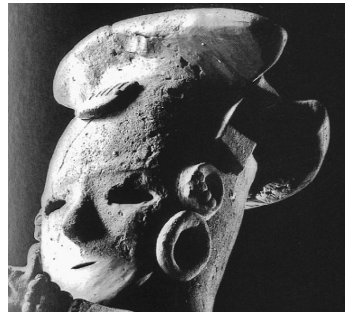


図4 櫛を挿した埴輪（群馬県綿貫観音山古墳）  
『人間の美術2 稲と権力』より転載

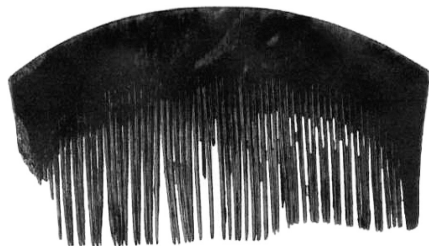


図5 横櫛（三重県六大 A 遺跡出土）

◆飛鳥・白鳳～奈良時代

高松塚古墳壁画には、前髪をとり、垂髪の末端を上へ結び上げてとめた髪型がみられる。また法隆寺五重塔塔本塑像は、頭上一髻または双髻、吉祥天女画像（薬師寺）は双髻の宝髻である。しかし奈良時代には、髻とは切り離せない豎櫛が姿を消して横櫛だけとなり、現在の櫛の原形となった。これ以降、櫛は豎櫛に代わり横櫛のみとなる。

遺品には「象牙製横櫛」（正倉院）と「イスノキ製横櫛」（図6）（平城京跡出土）があり、いずれも装飾がなく、梳き櫛と考えられる。ただし『万葉集』（巻13・3295）には、「黄楊の小櫛を押へ刺す うらぐはし子それそ吾が嬬」<sup>11)</sup>とあり、黄楊櫛が飾り櫛として挿され、装飾にも用いられた。

◆平安時代

894年の遣唐使廃止後、大陸との交流がなくなり、垂髪が登場する。『紫式部日記絵詞』（五島美術館）には、一髻の垂髪姿がみられるが、釵子と紫紐のみで櫛は挿していない<sup>12)</sup>。『源氏物語絵巻』東屋一（徳川美術館）には、長い髪を梳き櫛で梳く女性が描かれている<sup>13)</sup>。一方「豊明の節会」の五節舞姫は飾り櫛を装着しており、身分の高い女性のみが特別な時に装飾として櫛を挿した。

遺品には「黄楊製の横櫛」（和歌山県高尾山経塚）<sup>14)</sup>と伝菅原道真遺愛品「玳瑁象眼象牙櫛」（道明寺天満宮）（図7）がある。

2011年5月8日、著者が道明寺天満宮所蔵の櫛を実地調査した結果、幅10.0cm高さ8.0cmの大きさで、櫛の棟部分に7つの花卉文様を彫り込み、1つの花毎に

赤漆を塗り、上に鼈甲を嵌めこむ伏彩色技法が用いられていた。これは正倉院宝物にもみられ、中国・唐からの伝来品とされている。また花間に銅線唐草文・金泥珠文を配するなど極めて装飾性の高いものであった。

南坊城充興宮司によると、「道真自身が飾り櫛として使用した可能性もある」とのことであるが、男性使用の遺愛品というには、あまりにも装飾的で、女性好みのデザインであった。中国の江蘇省鎮江の唐墓より出土した梳は、横長の弧状で背部に装飾が施されていることから<sup>15)</sup>、中国唐時代の櫛と形状やデザインに共通性があると考えられる。

◆鎌倉・室町～安土・桃山時代

鎌倉時代、髪型は垂髪中心で髻がなくなった。庶民女性には労働時に髪を一時的に頭に巻きつけたリ、鉢巻をした<sup>16)</sup>。

遺品には、北条政子奉納の三島大社所蔵手箱の中に、化粧道具セットの一部として「紫檀地梅螺鈿櫛」18枚（残欠4枚）がある（図8）。これは梳き櫛とされるが、梅の花を象った貝を埋めて装飾した気品のある横櫛である。また茨城県香取神宮に奉納された櫛も梳き櫛とされる<sup>17)</sup>ことから、一部の貴族女性に梳き櫛が用いられていた。

室町時代、身分の高い女性は依然垂髪で、庶民は垂髪を簡単に結び、桂包が流行した。

この時代の唯一の遺品である熊野速玉大社所蔵橘蒔絵手箱内容品の「木製蒔絵櫛」（図9）は、装飾性の極めて少ない横櫛で、高貴な女性が髪を梳くために利用したものであろう。

安土・桃山時代にも身分の高い女性は垂髪の根を元結で結び、遊女は「唐輪髻」が流行し、庶民は頭に荷物を載せるため、後頭部で結った。この時代の櫛の遺品はないが、垂髪に梳き櫛を用いたと考えられる。

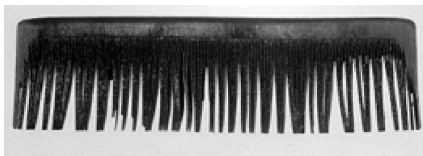


図6 イスノキ製の櫛（平城京跡出土）

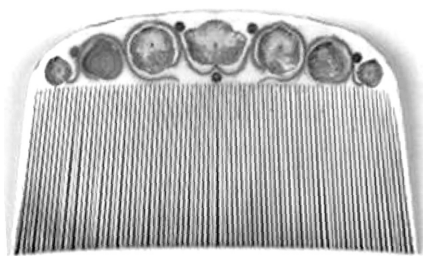


図7 「玳瑁象牙櫛」（道明寺天満宮所蔵）



図8 木製蒔絵櫛（鎌倉時代、静岡県三島大社所蔵）  
『特別展 古神宝 神々にささげた工芸の美』より転載

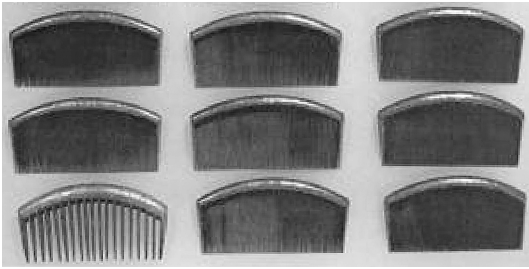


図9 木製蒔絵櫛（和歌山県熊野速玉大社所蔵）  
『日本の美術 女の装身具』5（No.396）より転載



図10 二枚櫛の遊女『百人女品定』部分

## ②江戸時代

### a. 種類・素材・装飾

#### ◆前期（慶長～正徳）

前時代に「唐輪髻」が誕生したことにより結髪が再登場し、その後「兵庫髻」「島田髻」「勝山髻」「笄髻」の4系統を基本に多様な髪型が生まれた。

『色道大鏡』（延宝6年～貞享5年刊）に、「六条の時、名家亜相の、御髪に櫛をさ、せ給へるを、その時の傾国共見て、さしはじめつるよし、尊子八千代、予にかたりき」<sup>18)</sup>とあり、久しく途絶えていた「飾り櫛」は、京都六条三筋町の廓で客の名家亜相の挿していた櫛を遊女がまねて挿し始めて復活した。当時公家男性に櫛を挿す習慣があったのである。

『諸艶大鑑』巻一（貞享元年・1684年刊）には、素人の遊女の身なりとして「頭には白目斑の鼈甲の挿櫛をさし（…）」<sup>19)</sup>とあり、貞享元年頃には鼈甲の飾り櫛が用いられていた。

『我衣』には、明暦（1655～1657）までは武家階級でなければ、櫛に鼈甲は用いられず、遊女は黄楊の櫛を挿したと記され<sup>20)</sup>、鼈甲や黄楊の櫛が用いられた。

天和・貞享の頃（1681～1687）には、一般庶民にも総透かし彫りの鼈甲の櫛が用いられた<sup>21)</sup>。しかし本物の鼈甲は輸入品で超高級品のため、代用品として「馬爪・牛爪（角）製の櫛」が盛んに作られ、鼈甲に似せて斑をつける「書き（描）斑」の工夫がされた<sup>22)</sup>。さらに元禄（1688～1703）頃には、本物の鼈甲の表面を蒔絵で装飾した贅沢な櫛<sup>23)</sup>や珊瑚玉で飾った櫛<sup>24)</sup>が登場した。

『我衣』には「元禄年中、（…）櫛の棟にも銀にて梅の枝或は唐草などすかし、さやのようにはめたり、重きゆへ髪下るとて、後不<sub>レ</sub>用」<sup>25)</sup>とあり、銀の枝や唐草文を透かし、鞘のようにはめるなど、一層技巧が凝らされた。

元禄17（1704）年には、幕府から「女のさし櫛かう



図11 扇を畳む職人女性『百人女品定』部分

がひ二、金銀かなもの無用候、尤蒔絵類も結構成仕形無用之事」<sup>26)</sup>との禁令が出された。挿し櫛に金銀や結構な蒔絵を用いた贅沢な櫛が多かったことが知れる。

#### ◆中期（享保～安永）

享保（1716～1735）頃には本物の鼈甲が一層高価で入手困難になったため、「蒔絵の木櫛」が全盛となった<sup>27)</sup>。他に「ガラス製の櫛」も登場した<sup>28)</sup>。また遊女の間では二枚櫛、三枚櫛を挿すことが流行した<sup>29)</sup>（図10）。これは湯女が男性客の髪を洗い、結い上げた後、乾くまで酒色を売ってもてなす際、いつもの櫛をはずし、塗り櫛を2枚挿したことが始まりといわれる。やがて2枚の塗り櫛を挿すことが湯女のシンボルとなった<sup>30)</sup>。

また『百人女品定』では、扇を畳む一般女性が髻の前に櫛を挿しており（図11）、享保頃には飾り櫛が遊女に限らず幅広い層に用いられた。

寛保3（1743）年には、金銀や蒔絵類で装飾された大形の櫛が禁じられた<sup>31)</sup>。元禄期には、金銀蒔絵を用いた櫛は重くて敬遠されたが、その後軽量化して、寛保期に

再び普及した。翌年（1744）にも禁令が出されるが、『我衣』に「延享元年、金銀の櫛、筭、かんざし堅く御停止、其後、象牙、つの、べつかう、錫等にてこしらへさす、寛延より、御停止にかまはずさすなり」<sup>32)</sup>とあり、元禄17年同様、寛保3年、延享元年の禁令にも屈しない女性の飾り櫛（装飾）に対する欲求の強さがうかがえる。

寛延期（1748～1750）には、『我衣』に「たぶ短し、びんを横へ出す、片わけの尻を上る、櫛、かうがい大なり」<sup>33)</sup>とあり、髪を横へ張り出す髪型が流行し、櫛も大きくなった。櫛の大型化は寛保期に続き2度目である。

宝暦期（1751～1763）には「象牙櫛」が流行し、蒔絵入りの華やかなものがみられた<sup>34)</sup>。

明和期（1764～1771）の『絵本藻塩草』（北尾重政、明和5年・1768年刊）には、遊女の顔の幅よりも広い飾り櫛が描かれ<sup>35)</sup>、寛延期の大型化の流行が継続している。

安永期（1772～1780）には、『嬉遊笑覧』（巻一下）に「平賀源内、菅原櫛といへるを工夫し出しける」<sup>36)</sup>とあり、平賀源内が高価な香木「伽羅」で作った櫛を創作した。これは吉原一流の遊女丁子屋雛鶴が挿して大評判となり、江戸中で流行した<sup>37)</sup>。

#### ◆後期（天明～慶応）

天明から寛政期（1781～1800）にかけては、髪が一層横に張り出す「燈籠髷」が流行し、それに伴い櫛もさらに大型化した<sup>38)</sup>。3度目の大型化である。遊女は大型化のみならず、櫛を何枚も挿すなど益々派手に頭部を飾った。

一方、享和（1801～1803）頃には「お六櫛」という安価な梳き櫛が木曾で登場した。その流行ぶりは後の文化4（1807）年に『於六櫛木曾仇討』（山東京伝）が出版されるほどであった。

お六櫛は『守貞漫稿』（嘉永6年・1853年刊）によると、「今世木曾路藪原駅にて、木製の龜なる指櫛を製し、専ら売之也、号けて於六櫛と云、（…）多くは素に非ず、粗なる朱漆又は藍色のちやんぬり等に鋤粉の蒔絵等ある物也」とあり、朱や藍色の粗末な木製塗り櫛であった。また田舎の女性が用いたともあり<sup>39)</sup>、飾り櫛は全国的に広まった。

これは脳を患ったお六という娘が御嶽山のお告げで柘植の櫛を作って挿したところ全快したので、その御利益を他人に与えようと作ったところ、たちまち名物になったという<sup>40)</sup>。

文化・文政期には、櫛は益々大型となり、遊女は櫛を

何枚も挿し、一層派手な着装となった<sup>41)</sup>（図12）。鼈甲は斑のない「白甲」が流行した<sup>42)</sup>。この頃、葛飾北斎の『今様櫛さん雛形』（図13）が出版されるなど、櫛のデザインが注目されるようになった。

この雛形図には、櫛の棟からはみ出すほど文様が装飾的に施されており、当時の豪華さがうかがえる。また有名蒔絵師による斬新な蒔絵文様に関心が集まり（図14）、蒔絵の施せる鼈甲櫛や木櫛が用いられ、蒔絵・螺



図12 「風流七小町 関寺小町 鶴屋内大淀」部分  
菊川英山、文化9年（名古屋市博物館所蔵）

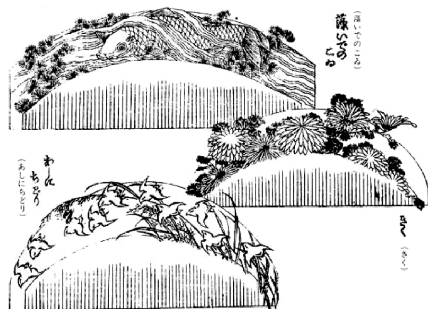


図13 「今様櫛さん雛形」所載櫛  
『北斎の絵手本』五

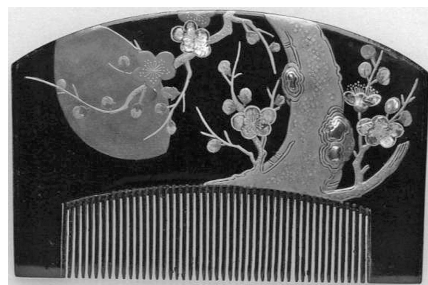


図14 「梅松月文様蒔絵螺鈿櫛」原羊遊斎  
（澤乃井櫛かんざし美術館所蔵）

櫛にみるデザインと漆の文化

鍔・象嵌・透かし彫りなどの装飾技法がみられた。

松茂斉作「御所車図蒔絵螺鈿櫛」（図 15）には、貝を

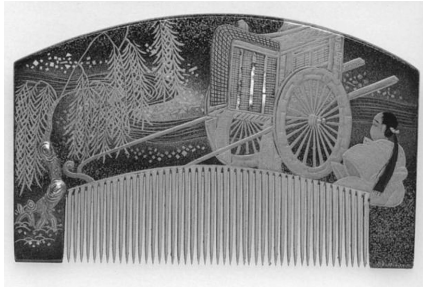


図 15 「御所車図蒔絵螺鈿櫛」松茂斉  
（澤乃井櫛かんざし美術館所蔵）

埋め込む「螺鈿」、文様を盛り上げ、蒔絵を施す「高蒔絵」、幾何学形の板金で文様を構成する「切り金」、粘り気のある漆で金粉を蒔き込む「付描」など、一つの櫛に多くの技法が用いられ、緻密で優美なものとなった。

b. 形体

正徳（1711-1716）頃には、『我衣』に「厚棟の木櫛

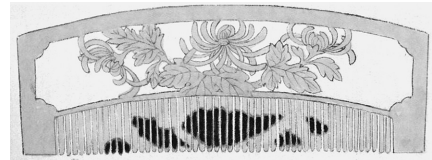

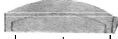











図 16 光琳形櫛  
『玳瑁図説』天・地 復版

表 1 櫛の形体の変遷

時代	山高形	利休形	光琳形	覆輪棟櫛	政子形	大形	小形	月形	角形	牡丹形	京丸小形
享保 (1716-35)											
⋮											
寛延 (1748-50)											
宝暦 (1751-63)											
明和 (1764-71)											
安永 (1772-80)											
天明 (1781-88)											
寛政 (1789-00)											
享和 (1801-03)											
文化 (1804-17)		●			●						
文政 (1818-29)											
天保 (1830-43)								●			
弘化 (1844-47)		●									

『玳瑁図説』、『日本装身具史』参照  
（阿部万里江作成）

流行、棟に金銀粉にていつかけをしたり、甚だ宜しく見へたり」<sup>43)</sup>とあり、棟に金銀粉を梨地に塗った厚手の木櫛が流行した。

金子直吉の『玳瑁図説』<sup>44)</sup> (天保12年・1841年刊)によると(表1)、享保期(1716-1735)には、親歯(両端の歯)の幅が広く、厚みの薄い「山高形」<sup>45)</sup>が登場する。寛延から宝暦期(1748-1764)には、山形で厚みが0.3cmほどの「利休形」と呼ばれる横櫛が登場し、以後何度も流行したという。

また、尾形光琳風の装飾的な模様を棟幅に透かし彫りした「光琳形」(図16)もみられた。光琳は既に正徳6(1716)年に亡くなっているが、この頃も依然として高い評価を得ていた<sup>46)</sup>。さらに棟から親歯にかけて銀で覆った「覆輪棟櫛」も登場した<sup>47)</sup>。

明和から安永期(1764-1780)には、角がより丸くなった「政子形」(鎌倉形)が現れた。これは先述の北条政子が三島大社に奉納した櫛に似ていることから名付けられ<sup>48)</sup>、文化8年以降にも再登場した。

寛政から享和期(1789-1803)には、櫛の大型化に伴い、鼈甲の櫛にさらに厚みが増した。

文化期(1804-1817)には大形がみられたが、江戸の芸者が禁令違反で捕えられた事件を契機に、文化の終わりから次第に小形になっていった<sup>49)</sup>。しかし『玳瑁図説』では、寛政・享和期より後の弘化期(1844-1847)の方が厚みを増したともいわれている。

『守貞漫稿』には、「江戸近世の櫛形小と雖ども太だ厚く重き故實に髪に挟むことなく圖の如く黒或いは紺の細

き八つ打緒を歯に縫付て此緒を以て髻背に結ぶ也」<sup>50)</sup>とあり、櫛は厚みを増して重くなり、髻に挿せなくなったので、紐を付けて装着した(図17)。

小型化の流れの中で誕生したのが三日月形の「月形」(図18)で、後の天保頃にも再登場した。これは五代目岩井半四郎が歌舞伎で「三日月おせん」を演じた時につけたことから広く流行した。

天保期(1830-1844)以降は、「角形」・「牡丹形」・「京丸小形」がみられ、サンゴ玉で装飾したもの、カットガラスやガラス絵で作ったものなど華やかなものや歌舞伎役者の紋を付けたものが流行した<sup>51)</sup>。

天保および嘉永期にも櫛に関する幕府の禁令<sup>52)</sup>が出されたが、相変わらず守られず、櫛の贅沢さは幕末まで続いたと考えられる。

櫛の形体には、この他にも「糸髻」、「京形」、「江戸形」、「野郎形」、「よしや形」、「太夫形」、「色紙形」<sup>53)</sup>があるが、現時点では使用時期や形状が特定できないので、名称のみにとどめたい。

#### 4. 櫛のもつ力

##### (1) 櫛の語源

櫛はくし(串)と同根の語とされ、串は細長く、先がとがり、ものをさし貫くのに使う。上代では土地占有のしるしに立てたり、地面を掘るのに用いた。櫛は髪に挿したり、髪を梳く道具で、櫛は占有のしるしでもあった。従って櫛を女性の髪にさすことは、その女性を妻とし、櫛を投げ棄てることは離縁を意味した<sup>54)</sup>。

また櫛は、「奇(く)し」「霊(く)し」に通じ、「霊妙なこと、不思議なこと」を意味する<sup>55)</sup>。

##### (2) 文学や習俗にみる櫛

###### ①『古事記』(上巻・神代篇)<sup>56)</sup>

- 死んだイザナミに会うために黄泉の国へ行ったイザナギは、髻(左ミズラ)に挿した櫛の歯に火を灯し、「見るな」と言われたイザナミの姿を見てしまう。
- イザナギはイザナミの遣わした黄泉醜女に追われ、髻を投げると葡萄の実が生じ、黄泉醜女がそれを食べている間に逃げた。しかしさらに追いかけてくる黄泉醜女に髻(右側のミズラ)に挿していた櫛を投げると竹の子が生じた。
- クシナダヒメを櫛に変えてスサノヲが髪に挿し、大蛇を退治する。

ここでは男性も櫛を挿しており、男女共に髻の固定と飾りのために用いられている。また一方で、櫛は生命を

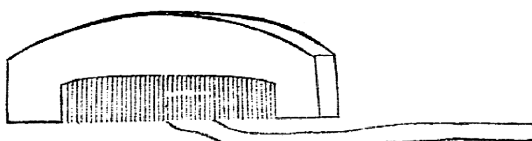


図17 紐付きの櫛  
『類聚近世風俗志』

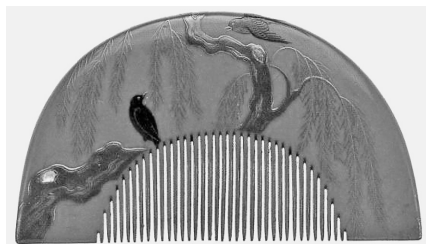


図18 月形櫛「川辺風景文様蒔絵櫛」  
(澤乃井櫛かんざし美術館所蔵)



生み、守る役割をしており、魔除けや不思議な力をもつものと考えられた。

## ②『源氏物語』第2巻・絵合<sup>57)</sup>

「別れ路にそへし小櫛をかどにて はるけき仲を神やいましめ」(朱雀院の歌)

これは、嵯峨の野宮で約1年の潔斎を終えて伊勢に下る斎宮(斎王)に、天皇が「別れの御櫛」を挿す儀式に寄せて詠んだ歌。意味は以下の通りである。

天皇は伊勢に下向する斎宮の発遣儀式で、櫛箱から黄楊の櫛を取り出し「京の方を赴き給ふな」と述べて斎宮の髪に別れ櫛を挿した。神はそれを口実にあなたと自分の仲を遠く引き離れたのだらうか。

## ③日本各地の習俗

沖縄の先島では、嫁入りに際して内地の乳母「むらに」と花嫁の間で行われる儀式があり、乳母が幼児より育てた花嫁に別れを惜しむ心で花嫁に櫛を挿す。挿した後に振り返ることは不吉とされた<sup>58)</sup>。

その他にも日本各地には、櫛を挿すことは婚約のしるし、櫛を落とすと苦がぬける、他人の櫛を拾うとその人は一生苦労する、櫛を井戸へ落とすと目が悪くなる、櫛の歯が折れると不吉、櫛をまたいではいけない、投げ櫛は絶縁・不吉を意味するなど、櫛にまつわる様々ないい伝えがある<sup>59)</sup>。

つまり古来より櫛には何らかの力があり、粗末にすると罰が当たると信じられてきたのである。力とは身を守る力、魔除けの意味が強く、いい伝えの多くが「火」「目」「別れ」と関連することから、『古事記』の記述の影響もうかがえる。櫛を身に付けることで身(生命)を守ろうとする信仰は古く、そして新しい。

## (3) 髪と櫛

髪の毛は意志に関係なく成長し、切ってもまた伸びてくる。年をとれば白髪にも変色する。この性質は昔から不思議なものと考えられ、切り離しても生命を持つ肉体とみなされた。

「船霊信仰」(図19)はその一例で、新造船に船霊を入れる際に男女1対の人形、銭、船主の妻や船頭の妻の髪の毛を中央帆柱下の神棚に納め、航海の安全や豊漁を祈願した<sup>60)</sup>。

また「髪上げ」は、平安時代からの女兒の成人儀式であるが、結婚する男性に髪を切ってもらう際に櫛が用いられる。髪あるいは櫛は「占有のしるし」として扱われる。この占有のしるしの意味は「櫛」と同根の語である「串」に通じる。つまり霊力があると信じられた髪に用いる櫛には特別な意味があり、髪は「くし」とも読むこ



図19 船霊様のご神体  
『民俗民芸双書 11 海の民俗学』より転載

とから、髪と櫛は非常に深い関係性にあるといえる。

## 5. 結 び

日本における櫛と漆の歴史は古く、縄文時代には、結髪をした女性に赤色漆塗り堅櫛の飾り櫛が用いられた。弥生、古墳時代にもその傾向は引き継がれたが、古墳時代には漆を施さない横櫛が初めて登場した。奈良時代には横櫛のみとなり、今日の基本形ができた。

平安時代以降、髷のない垂髪が一般化すると、飾り櫛は殆ど用いられなくなり、身分の高い女性に装飾性のない梳き櫛が用いられた。

しかし江戸時代に入り、垂髪に代わり結髪が再登場すると、漆塗りの飾り櫛が庶民階級にまで広まった。また燈籠髷の流行によって形体の大型化が進むなど、デザインにおいても髪型による大きな影響がみられた。つまり飾り櫛は結髪文化と共に消長を遂げ、髪型が櫛のデザインや発展に大きな影響を与えたといえる。

江戸時代には、漆工技法も大きく発展し、素材、装着方法、形体に多様性がみられるようになった。

素材は象牙・木・ガラス・鼈甲で、蒔絵や透かし彫りが施された。特に形体の流行が著しく、文化・文政期頃に大型化し、大形・小形・月形など種類も豊富となり、デザインにも凝るようになった。

一方、縄文時代から櫛に用いられた漆については、その霊力から「神性が宿る」という信仰が生まれ、防腐作用や防水作用、接着作用などの特性を活用することで、畏怖を転じて「邪悪を払う」という霊験が付与された。つまり漆は生命を守る神秘的な力をもつものとして認識

され、そこに呪術的な意味が加えられた。貴重な漆の多くが、生活用具や葬儀・祭事などの儀式に使用されたことから、人々の漆に対する並々ならぬ思いをくみ取ることができる。

また櫛の語源や同意語から、櫛そのものにも魔除けや、生命を守り・育む力があると信じられた。上代から江戸時代に至るまで、櫛には漆を施したものがその殆どを占めており、漆と櫛の関係は極めて長く、深いものがある。

さらに赤色は、古来より太陽・火・血・復活再生などを象徴し、強い力をもつと考えられた。黒色もまた闇、死、穢れなどを象徴し、赤色同様強い力を宿すものと考えられた。

赤色・黒色の漆塗りは、色彩と漆という二つの力の相乗効果を期待したもので、より強い力が宿ると信じられた。しかし生命を守る力をもつ櫛や漆を身につけられたのは、身分が高く、しかもシャーマンのような祭事や儀式を司る特別な女性に限られた。

漆の入手や漆工芸品の製作は、奈良時代から国家的管理と施策の下で行われ、国家もしくは権力者の強い要請によって技術的に発展してきた。江戸時代になると、蒔絵師は幕府の公的機関の下で保護・養成され、そこで多くの漆工芸品を製作した。その間、名工と呼ばれる蒔絵師が数多く輩出され、高度な技法を駆使した優れたデザインの櫛を世に送り出すことに繋がった。

また漆や漆工品は鎌倉時代に安価なものが出回るまで、庶民にとって縁遠いものであった。さらに髻を結う結髪様式が挿し櫛（飾り櫛）使用の必要要件であったことから、櫛は江戸時代まで庶民に用いられることはなかった。例えば梳くための櫛であっても、長い髪を梳いて手入れができるのは上級階級者に限られた。このように櫛と漆の共通点は、長きにわたり、それが権力者だけの所有物であったことにある。

櫛と密接な関係をもつ髪にも、その生命力と神秘性から人々が畏敬の念を抱くようになり、船霊信仰にみられるように呪術の意味が付加された。

漆塗りの飾り櫛を身につけることは、櫛、髪、漆、色彩（赤・黒）のもつそれぞれの力を結集し、さらに増強することを意味している。縄文時代、漆塗りの櫛によって「生命を守る」強い力を自らに取り込もうとした精神は、その後も脈々と受け継がれ、やがて江戸時代に結髪文化と蒔絵技法の発展と相まって、「意匠の美」という藝術力が加わり、美しい漆塗りの飾り櫛を生み出したと考える。

もはや櫛は、生命の守護だけではなく、また一部の限られた者の専有物ではなくなり、心を癒し、美的生活を楽しむ装身具としても、庶民の間に広く愛用される存在となったのである。

# 注

- 1) 朝日新聞, 2011 年 10 月 7 日付朝刊
- 2) 四柳嘉章『漆の文化史』, 岩波書店, 2009 年, p.4
- 3) 財団法人石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』第 17 号, 2007 年 [http://www.ishikawa-maibun.or.jp/senter/pdf/jouhou\\_17.pdf](http://www.ishikawa-maibun.or.jp/senter/pdf/jouhou_17.pdf)
- 4) 縄文時代以降の変遷は以下の文献を参考にした。
  - ①室瀬和美『漆の文化 受け継がれる日本の美』, 角川書店, 2002 年
  - ②大西長利『漆 うるわしのアジア』, NEC クリエイティブ, 1995 年
  - ③四柳嘉章『漆Ⅰ』, 法政大学出版局, 2006 年
  - ④四柳嘉章『漆Ⅱ』, 法政大学出版局, 2006 年
  - ⑤山本勝巳『漆百科』, 丸善株式会社, 2008 年
- 5) 島根県松江市タテチョウ遺跡出土の「黒色漆地に朱漆三角鋸歯文櫛」は、韓国の石村洞土坑墓や茶戸里遺跡の出土品に用いられた黒色漆技法と類似している。
- 6) 尾関清子「わが国における「櫛文化」の形成に関する考察－発生期の「櫛文化」の特徴について－」『東海学園大学紀要』17, 東海学園大学, 1982 年, p.97
- 7) 和田 清, 石原道博編『魏志倭人傳, 後漢書倭傳, 宋書倭國傳, 隋書倭國傳』, 岩波書店, 1951 年, p.80
- 8) 「結歯式竹製赤漆塗櫛」(納所遺跡), 「刻歯式木製赤漆塗櫛」(服部遺跡)
- 9) 岩永省三「弥生時代の装身具」『日本の美術』3, 至文堂, 1997 年, p.30
- 10) 高 春明『中国五千年女性装飾史』, 京都書院, 1993 年, p.73
- 11) 稲岡耕二『和歌文学大系 萬葉集 (三)』3, 明治書院, 2006 年, p.408
- 12) 『日本絵巻大成 紫式部日記絵詞』9, 中央公論社, 1978 年
- 13) 『日本絵巻大成 源氏物語絵巻 寝覚物語絵巻』1, 中央公論社, 1977 年
- 14) 大塚信一「古典の博物館 第二十六回 櫛 装飾と実用のあわいに」『古浄瑠璃 説教集』, 岩波書

- 店, 1999 年, P.11
- 15) 釣田敏子「中国古代の髪飾」『風俗』27 卷 3 号, 日本風俗史学会, 1988 年, p.6
- 16) 『法然上人絵伝』知恩院所蔵
- 17) 橋本澄子『日本の髪型と髪飾りの歴史』, 源流社, 1998 年, p.100
- 18) 『続燕石十種』第三卷所収, 中央公論社, 1980 年, p.328
- 19) 『対訳西鶴全集』二卷所収, 明治書院, 1979 年, p.40
- 20) 『続燕石十種』第一卷所収, 中央公論社, 1976 年, p.176
- 21) 喜田川守貞『類聚近世風俗志』, 聖光社, 1949 年, p.327, p.330
- 22) ①橋本澄子, 前掲書, p.101  
②『澤乃井櫛かんざし美術館 櫛かんざし』, 澤乃井櫛かんざし美術館, 2003 年, P.169
- 23) ①喜田川守貞, 前掲書, p.300  
②『我衣』『続燕石十種』第一卷所収, 前掲書, p.185
- 24) 『西鶴織留』『対訳西鶴全集』十四卷所収, 明治書院, 1976 年, p.32
- 25) 『続燕石十種』第一卷所収, 前掲書, p.186
- 26) 石井良助校訂『徳川禁令考』前集第五, 創文社, 1959 年, p.364
- 27) 『我衣』『続燕石十種』, 第一卷所収, 前掲書, p.185
- 28) 露木 宏『日本装身具史』, 美術出版社, 2008 年, p.85
- 29) 『我衣』『続燕石十種』第一卷所収, 前掲書, p.187
- 30) 村田孝子『江戸三〇〇年の女性美 化粧と髪型』, 花林舎, 2007 年, p.90
- 31) 石井良助, 前掲書, p.366
- 32) 『続燕石十種』第一卷所収, 前掲書, p.185
- 33) 同書, p.181
- 34) 『燕石十種』第一卷所収, 国書刊行会, 1907 年, p.211, p.213
- 35) 黒川真道『日本風俗図繪』所収, 日本風俗圖繪刊行會, 1915 年
- 36) 日本隨筆大成編輯部編『日本隨筆大成』別卷所収, 吉川弘文館, 1979 年, p.193
- 37) 金沢康隆『江戸結髪史』, 青蛙社, 1998 年, pp.215-216
- 38) 大塚信一, 前掲書, p.11
- 39) 喜田川守貞, 前掲書, pp.301-302
- 40) ①中田節子『広告で見る江戸時代』, 角川書店, 1999 年, p.191  
②太刀掛祐輔『櫛の文化史』, 郁明社, 1996 年, p.202
- 41) 露木 宏, 前掲書, p.85
- 42) 喜田川守貞, 前掲書, pp.329-330  
露木 宏, 前掲書, p.85
- 43) 『続燕石十種』第一卷所収, 前掲書, p.185
- 44) 金子直吉編『玳瑁龜図説』天・地 復版, 東京鼈甲組合連合会, 1982 年, pp.96-178
- 45) 同書には「山高形」の名称はないが, 露木宏, 前掲書, p.84 によると, 同形の日本宝飾クラフト学院蔵の櫛を「山高形櫛」と称している。
- 46) 安田篤生「江戸時代における光琳像の変遷について (中) - 明和 ~ 享和」『愛知教育大学研究報告』52, 2003 年, pp.95-96
- 47) 露木 宏, 前掲書, p.84
- 48) 大原梨恵子『黒髪文化史』, 築地書館, 1988 年, p.253
- 49) 露木 宏, 前掲書, p.86
- 50) 喜田川守貞, 前掲書, p.367
- 51) 露木 宏, 前掲書, p.86
- 52) 石井良助, 前掲書, p.371
- 53) ①大原梨恵子, 前掲書, p.253  
②太刀掛祐輔, 前掲書, p.194
- 54) ①大野 晋『岩波古語辞典』, 岩波書店, 1974 年, p.396  
②堀井令以知『語源大辞典』, 東京堂出版, 1988 年, pp.84-85
- 55) ①大野 晋, 全掲書, p.397  
②松村明他『国語辞典』, 旺文堂, 1997 年, p.348  
③太刀掛祐輔, 前掲書, p.15 参照
- 56) 本居宣長, (小野田光雄解説)『訂正 古訓古事記』上, 勉誠社, 1981 年, p.41
- 57) 今泉忠義『源氏物語』「総合」, 桜楓社, 1976 年, p.343
- 58) 折口信夫『折口信夫全集』第 16 卷, 中央公論社, 1954 年, p.10
- 59) 柳田國男『定本 柳田国男』第 14 卷, 筑摩書房, 1962 年, p.281
- 60) 牧田 茂『民俗 民芸 双書 海の民俗学』11, 岩崎美術社, 1966 年, pp.160-168

(2011 年 11 月 9 日受理)